
ロリコン・コンプレックス！

佐藤みりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロリコン・コンプレックス！

【Nコード】

N6010Z

【作者名】

佐藤みりん

【あらすじ】

こんにちは、紳士・淑女のみなさん。突然ですが、ふたつ質問をさせていただきます。あなたは、いま、恋をしていますか？そして、その恋は、順調ですか？もし恋がうまくいかないとき、その障害となっているものは何でしょうか？身分差？年の差？自身の抱いているコンプレックス？趣味や主張？遠距離？相手に好きな人がいたり？手強い恋のライバルが？はたまた、二次元と三次元の壁？条例？社会の優しいルール？そんな風に、いつだって恋に邪魔者はつきもの。さまざまな壁があるかと思

います。それを前に、不安になるのは当然です。どうすればいいか、途方に暮れてしまうこともあるでしょう。だからそんな時、参考になればと、この物語をひとつ見本として差し出します。これは、迫りくる障害なんて跳ね飛ばし、立ちふさがる常識の壁を突き破る、恋に生き愛へとひた進む女の子の、ピュア・ラブストーリー。 (これはロリコンのバイブルではありません。ロリータ成分は補充できないかと思われまので、あらかじめそれをご了承のうえでお読みください)

その1 らぶらぶ

わたしの好きな人は、ロリコンです。

ある日、わたしは言いました。

「先輩、わたしの胸はぺったんこです」

わたしは胸に手を当て、ずっと先輩の目の前に立ちふさがりました。

わたしのいまいる場所は先輩の部屋です。椅子に座って何やら本を読んでいた先輩は、目の前に屹立するわたしに一瞬だけ視線を上げ、そしてすぐに戻しました。

「そうだね。ぺったんこだね。ちなみに君は、ぺったんこの語源は知っているかな」

「無論です」

落ち着きをはらって言葉を返す先輩は、わたしの逆セクハラ発言に対してちつともあわてていません。あっさりと肯定してみせたどころか、さりげなく話題を変えようとしています。

わたしからのセクハラに慣れたのでしょうか。ちなみにぺったんこの語源は諸説ありますが、もちつきの際にぺったんぺったんと音

が鳴ることからという話を聞いたことがあります。真偽は知りません。

先輩の冷たい態度にも、わたしは揺るがずめげずに続けました。

「背だつてちっちゃいですし顔だつてくりくりの童顔です。制服を着ていても中学生、私服で男子の友達と繁華街を歩いていたときは小学生と間違えられて、一緒にいたその男友達が条例違反の容疑で補導されたこともあります」

「それはその人も災難だったね……というか、自分で言っていて悲しくならないかな」

「そうですね。昔は確かに鏡を見るたびに落ち込みましたし着る服が限られて泣きたくくなりました。中学一年生の折に勇気を出して梓ちゃんと初めてブラを買いに行った時、一緒に行った彼女がAだのBだの店員さんと相談しているのに、わたしといえばサイズを計った時にまるでちよつと背伸びをした小学四年生をみるかのような微妙な笑顔で『お客様……まだご必要ではないのでは？』といわれて、それでもスポーツブラとか子供用のじゃないちゃんとしたブラが欲しかったので喰い下がってその結果『申し訳ありません。当店にはAAやAAAの在庫はございません』と謝られたというトラウマは、いまでも忘れられませんが、それでもいまは悲しくなんてありません！ 生まれ変わったんです！ むしろ先輩のニーズにこたえられることを喜ばしく思ってます！ ほら先輩！ ちっちゃくまな板で小学生ばりの童顔！ ムラムラしませんか？」

わたしは顔を喜色に染めてずいと顔を近づけます。その距離、五センチ。高鳴る心音は伝えられなくても、わたしのあらぶる吐息が先輩に伝わる距離です。

先輩は非常に嫌そうな表情で顔をそむけました。

「しないよ。君は僕の好みではないからね」

淡々とした答え。わたしはそれに、むむむと眉を寄せました。

こんなにかわいい女の子が迫っているというのに、なんて気のない反応でしょうか。それとも先輩の読んでいる本は、鼻先に迫っている女の子よりも心ひかれるものなのでしょうか。

二次元ですらない文字の集合体ごときに敗北するなど、わたしの女としてのプライドが許せません。ちらりと本の表紙に目をやりま

す。
先輩の読んでいる本のタイトルは『幼女甲冑の薦め』というものでした。

「……………」

……………幼女甲冑って、なんでしょうか？ なにやらものすごくハイレベルな匂いがしますけど……。お客様の中にご存知の方いらっしやいますか？ いらっしやいましたら、ご起立お願いします。その後、条例違反で警察に自首してくださいませー、とか一瞬そのカオスさにキャビンアテンダントごっこをしかけましたが、踏みとどまります。くじけません。わたしの恋はこんなことで折れるわけにはいかないのです！

こうなれば、実力行使しかありません。

わたしは先ほど意図して近付いた先輩の顔を見ました。理知的で整った顔。ニキビのひとつもないすべすべの頬。凛々しくも涼やかなその表情。そしてメガネ！ クールな美男子がそこにいます。

よし、と決めました。

キスをしてしまおう。

本にできなくてわたしにできることは多々ありますが、その筆頭たるものが肉体的接触コミュニケーションであることは疑いの余地もありません。まして、いまここは先輩の家で先輩の部屋の中です。そして先輩の部屋にいるのは、わたしと先輩だけです。ようするに、

密室で男女がふたりきりなのです。

これはやってしまっても問題ないでしょう。

いえ、むしろやってしまえという天啓ではないのでしょうか。そう、AをきっかけにBに移行しCまでゴーという神のお告げに違いありません！

先輩の隙について……いまだ！

「何やってんのよ、ゆみ！」

と思ったその時、ぱんつと音を立てて扉が開きました。

「あれ、梓ちゃん」

「やつと来たか梓」

わたしと先輩の声がぴつたり重なりました。

バッドタイミングでわたしの名前を呼んで部屋に飛び込んできたのは、中学生からの友達であり先輩の妹である梓ちゃんです。

実はもともと今日は彼女の部屋にお呼ばれていたのです。わたしが先輩の部屋にいるのは残念ながら両者の同意のもとではなく、梓ちゃんがお手洗いに行っている間に彼女の部屋を抜け出し、勝手に先輩の部屋に入りこんだからにすぎません。

梓ちゃんはわたしの正反対にあるといってもよい見事なプロモーションをしている、大人びた美人さんです。冬休みを終えれば高校二年になる彼女ですが、それを知らない人が見れば実際年齢より二つ三つ上の女子大生に見えるでしょう。

梓ちゃんは背筋をぴんと伸ばして声を張り上げました。

「早くその変態から離れなさいつ。襲われるわよ！」

「そんなっ、梓ちゃん！ わたしと先輩を引き離さないてください！」

「おいおい梓。仮にも友達を変態だなんてひどいんじゃないかい？」

その言葉に、梓ちゃんの眉がぴくりと反応しました。

「……はあ？」

憎しみを舌にのせ、なに言ってるのこいつ、といわんばかりに顔をしかめます。梓ちゃんの動きに合わせて、腰まで伸びた黒髪がざらりと流れました。

「あのねえ……」

そうして梓ちゃんがゆっくり視線を合わせたのは、先輩の方でした。

「アホなの、兄貴？」

梓ちゃんの視線たるや、真冬のツンドラ平原のように冷やかでした。目元がちょっときつめだということもあって、蔑視という言葉を見事に体現する様がとっても似合っています。

「いまのは兄貴に言ったのよ、この変態クソロリコンがつ。ほら、離れなさい、ゆみ。あんた幼児体型だから兄貴の趣味にヒットしかなないのよ。危ないわよ。こっちおいで」

「うにゃんっ」

顔近づけすぎ、と言いながら梓ちゃんがわたしの襟を掴んでひっぱりました。梓ちゃんは「月曜にはあのクソロリコン兄貴を包装用の新聞紙で梱包して焼却処分してやりたい」と暴言を吐くほどの先

輩嫌いなのです。

「梓ちゃん、離してください！」

「だからダメ。そいつが五歳以上十三歳未満にしか興味がない口リコンの変態クズ野郎でもダメ。あんまり無防備すぎるのはよくないわ。そのうち襲われるわよ」

「先輩ならいいですつ。望むところです！ わたしは先輩に襲われたいんです！ いえ！ むしろ！ わたしが先輩を襲ってるんです！」

「落ちつけちびっこ！」

じたばたと抵抗するわたしの頭に、びすつと梓ちゃんのチョップが振り下ろされました。

その1 らぶらぶ (後書き)

こんにちは。あのタイトルとあらずじでいったい何名の紳士な方が釣られたか、あのタイトルとあらずじで、本命の淑女の方は見に来てくれるのか、なんだかちよっぴりわくわくしている作者です。あ、一応は断らせていただきますが、あらずじの八割は冗談でできています。

この物語は、大体を書き終えてからの連載となっております。一話を場面ごとに投稿する形になるので、分量は一話につき千文字から五千文字ほどに。平均で二日に一回のペースで投稿していく予定です。

一話目、くすりとでも笑いを誘えましたでしょうか。不安に思いつつも、主人公のゆみに付き合っていたただける懐の広い方がいらっしやることを切に祈りまして。

その2 がやがや(前書き)

前話から時系列がちょっと飛びます。

その2 がやがや

春つらら。

小学生の高学年になる辺りから身体的な成長が止まり、中学生よりちっちゃいっちゃい言われ続けたわたしもいよいよ高校二年生になりました。相変わらずちっちゃい言われているのは変わりませんが、二年生です。一年生の時ほどの新鮮さと始まりの予感はありませんが、それでもちよつと胸がドキドキします。

時計を見ると、八時になる少し前です。ぼつぼつ人も集まってきました。新しいクラスメイトは、全然知らない人もいれば何となく見覚えのある人もいます。運が悪いのでしょうか、親しい友人はいまのところゼロ。さびしいことです。

わたしは何の気なしに校庭を眺めました。桜の花は大部分が散ってしまい、そろそろ葉桜に移ろうかとしています。

そんな春ですが、残念ながら、わたしの恋の桜はまだ咲いていません。

先輩に恋して以来のアタックに次ぐアタック。猛アタックに猛アタック。わたし史上でここまで積極的になったことはないというぐらいの突進アタックを続けたといえますのに、先輩は毛の先ほども私に興味を示してくれませんでした。

理由ははっきりとわかっています。

先輩がロリコンだからです。ロリータ・コンプレックスだからです。合法などには見向きもせず、同年代などもってのほか、五歳以上十三歳未満にしか反応しない、真なるロリコンだからです。

……そういえば、コンプレックスって劣等感という意味ですよね……。しかしコンプレックスと言われて思い浮かぶ単語は、シスコン、ブラコン、ロリコンなどなど犯罪臭しかしないものばかりです。なぜ昨今では変態の代名詞みたいな言葉として普及しているのです。

よ
うか。

「おはよ、ゆみ」

思い悩んでいますと、声をかけられました。梓ちゃんです。振り返ればそこには、あいかわらず高校生とも思えない大人びた美人さんがいました。

「おはようございます、梓ちゃん」

わたしもぴよこんと頭を下げます。喜ばしいことに、今年も梓ちゃんと同じクラスなのです。

「今日はいいい天気ね。兄貴みたいな変態は、この日の光を浴びたら消え去ってしまいそうなくらいいい陽気」

「先輩はゾンビか吸血鬼ですか……？」

今日の天気にとりげなく自分の願望を混ぜる梓ちゃんに答えて、ふと思いつきました。そうです。わからないことがあったら、梓ちゃんに聞けばよいのです。

「梓ちゃん。コンプレックスってどういう意味か知っていますか？」

「コンプレックス？ またややこしいこと聞いてきたわね……直訳すると『複合』とか『複雑』よ」

ややこしいと言いつつも、さして考えずにあっさり答えてくれました。梓ちゃん、頭も非常に良いのです。梓ちゃんは決して認めませんが、博覧強記の先輩の影響でしょう。

「複雑……？ はじめて聞きましたけど」

「まあ、そつちはあんまりなじみないわよね。日本語的な用法で『劣等感』って使われているのは、微妙に誤用なのよ。まあ、厳密には誤用とも言いづらいけど……。ちなみにコンプレックスはフェティシズム　俗にいうフェチとほぼ同義に使われることもあるから、ファザコンとかシスコンとかいう使われ方もするの」

わかりやすくするためにだいぶ省略したから詳しくは自分で調べて、と言って話を切り上げました。

うん、勉強になりました。あまり簡単に人に聞きだすクセをつけるものではないでしょう。知りたいことを自分で調べるということは、自己を独立させる第一歩でもあります。

そうして梓ちゃんとおしゃべりをしていますと

「やつほう、藤堂梓と佐々木ゆみ！　今年も同じクラスか！　嬉しいよー！」

「なんだなんだー。まだホームルームもやってないのに授業してるのかー」

声をかけてきたのは去年も同じクラスだった二人です。成績はもといその行動がおバカで有名なコンビ

です。最初に声をかけてきた元気のいいショートカットの方が黒衣莉由、間延びした口調のふわふわ髪のほうが白木岸祢。通称、白黒コンビで先生からも二人セットで目をつけられています。

「おはようございます、おふたりとも」

このふたりも一緒のクラスなんですね。残念です。

梓ちゃんもわたしと同意見なようで、ふたりを見るや目を剣呑に尖らせました。

「何よ、あんたら同じクラスじゃないでしょう。ていつか階が違わよ。二階じゃなくて、一階でしょ」

ちなみにうちの学校は、一階が一年生、二階が二年生、三階が三年生という具合に教室が区切られています。

「ちょっと待て！ 留年なんてしてないぞ。あっちだけならともかく、あたしは違う！」

「おい！。うちにはばかじゃないぞー。あっちだけなら、まず間違はなくそうだけどなー」

邪険にあしらう梓ちゃんに、おバカのふたりは互いを指差しました。

ふむ、つまりは

「なるほど。要するに二人とも留年なんですね。どうぞ仲良く一階へゴーしてください」

「なに！」

「むっー」

親指を下に向けてみせると、ばかり、と二人の視線が力チ合います。

「お前が馬鹿なせいで！」

「アホがいるからだろー」

そのまま見えていますと、どっちが真のバカかの論争が始まりました。おバカのふたりはあいかわらず仲が良いようです。

梓ちゃんがため息をつきました。

「新学年になったっていうのにやかましいわね、バカどもは」
「でも梓ちゃんは物知りで教え方も幅広いので、よい教師になれる
と思いますよ。ほら。古典の山川先生とかよりはずっと」

あの白黒コンビが進級できたのは、間違いなくテスト前に開いて
いた梓ちゃんの勉強会のおかげです。

「ゆみも膨らませない」
「あつ」

こつんとこづかれました。意外とわっしょい攻撃に弱い梓ちゃん
は照れているらしく、ちよっと頬を紅潮させていました。

「それより放課後の同好会、行く？」
「無論です」

わたしは力強く頷きました。

同好会というのは、わたしと梓ちゃんと先輩の三人で形成されて
いるものです。ということ、先輩と確実に出会えるチャンスです。
先輩と同じ部屋にいられるのです。先輩と同じ空気が吸えるのです。

「地球が割れても行きますとも！」

それで行かないわけがありません。わたしは先輩を愛しているの
です。

「あつそ」

鼻息を荒くするわたしの頭に、梓ちゃんはぽんと頭に手を置きま
した。

「ま、とりあえずホールルームと始業式が先ね」

やれやれとため息をついて、梓ちゃんが自分の席に向かいます。おバカの二人の論争の決着を待たず、キンコンカーンカーンとチャイムが鳴り、同時に先生が入ってきました。

「おい、そこの白黒二人は新学期初日から何やってるんだ。始業式前から早々に生徒指導室に行きたいのかお前らは」

去年の生徒指導を担当していた体育教師が、今年は担任のようです。そのお言葉に、ふたりはびくりと身を震わせて大人しくなりました。

今日は平和な日になりそうです。

その3 めらめら

わたしと梓ちゃんはとことこ廊下を歩いていました。

「終わりましたね」

「終わったわね」

梓ちゃんがぐぐつと背伸びをしました。

今日は始業式とホームルームだけなので、早く終わっています。クラスは梓ちゃんとおバカのふたりを筆頭に、女子の知り合いが結構いたのですぐになじめるでしょう。ちなみに始業式を妨害したおバカの二人は生活指導室行きです。

男子は見知ったのが何人か、それにひとりだけ去年仲良かったのがいましたが……うん、あれは見なかったことにしましょう。

「バカふたりはあいかわらずバカだったわね」

「変わらないので、安心できますけどね。あのふたりを見てるとなごみますよ」

「そう？　しっかし学校側もよくあの二人を同じクラスにしたわよね。始業式そうそうやらかしてるしさあ」

「問題児をまとめて見はりやすくしたんじゃないですか？　生徒指導の中村が担任になったのって、どう考えてもあのふたりのせいです」

「いや、それでも普通別々に分けるって」

おバカのふたりをネタにほのぼのと会話を交わします。

いまはまだ昼前。時計をみると十一時を少しまわったところでした。

始業式はぴかぴかの一年生を見た以外、校長の話も退屈で特に印象もなく終わりました。

「この後は同好会ね」

「そうですね」

地域福祉同好会。

それがわたしと梓ちゃんが所属しており、また去年先輩が入学早々に立ち上げた同好会の名前です。

その活動内容は、地元のボランティアに参加しまくるといふ同好会です。遊びたい盛りの高校生ではいつさいの魅力を感じられないこと間違いなしの、存在理由を疑ってしまうような活動内容でしょう。

同好会の強いて得になる点を上げるならば、内申が良くなるくらいでしょうか。奉仕活動が好きで好きでたまらないという変わった嗜好の持ち主でもない限りは、活動に惹かれて入りたいとは思いうなとここではありません。まあ、わたしからすれば、先輩がいるというその一点で全ての悪条件は払拭されます。

ちなみに去年の冬までには同好会員は先輩と梓ちゃんの藤堂兄妹ふたりでした。一年の冬休み明けにわたしが加入し、現在では三名になっていきます。

規模的に見れば非常にちっぽけな団体です。あくまで同好会であり部活ですらないのになぜ部屋が与えられたかといえは、非常に学校に都合がよいからでしょう。去年の半年ほどを真面目に活動してから、部室が与えられたらしいです。

わたしたち地域福祉同好会は確かに学校の評判にプラスになる要素しかない同好会です。その上、わたし達は非常に真面目に活動しています。傍から見れば健全この上ない同好会でしょう。

ただ、先生方は気がついていないのでしょうか。

先輩が獲ってくる仕事は、主というか全て児童福祉のボランティア

「エアだということ。」

「今日は同好会は会議の日でしたっけ」

同好会の活動は基本、ふたつに分かれています。ひとつはボランティア活動そのもの。そしてもうひとつは、数あるボランティア活動の中で何をするか選別して決めるための会議です。

「そうよ」

梓ちゃんは目をぎらぎらと怒らせて頷きました。

あいかわらずヤル気が満ち満ちています。もはや殺気と間違えかねないほどの気を放出しているのは、梓ちゃんが同好会に入ったエピソードに起因するものです。

「相変わらずヤル気に満ちてるというか殺る気に満ちているというべきか……まあ、梓ちゃんの目的はそつちですからね」

去年入学したばかりの時分です。児童福祉ばかりやっているという同好会の内容を知った梓ちゃんが怒り狂い「あの兄貴が犯罪行為に走らないように見張ってくれるわ!」と叫び入部したという逸話があるのです。おバカのふたりに聞いたことですが、多分事実でしょう。

よって会議の日、同好会の討論は非常に白熱します。

「絶対、変態兄貴には負けないわよ……!! あのロリコンに児童福祉になんて、やらしてたまるもんですか!」

梓ちゃんが、ぐぐつと拳を固めました。気の入れようが半端ではありません。今日も藤堂兄妹の論争が繰り広げられることでしょう。

ふたりの論争は見ていただけで面白いものがありますから、構わないのですが。

過剰なまでに気合を入れる梓ちゃんの肩に、ぼんと手を置きました。

「まあ、でもお昼を食べてみましょうよ。まだ時間がありますし、学食でおしゃべりして時間を潰しましょう」

同好会活動は、一時からです。

「そうね。あのロリコンを叩きつぶすために、しっかり食べないとね」

梓ちゃんが、不敵ながらも怪しい笑顔を浮かべていました。

その4 きらきら

先輩は、ロリコンです。

わたしは先輩のことが大好きですが、先輩はそれと同じくらい幼女を愛しています。先輩がロリコンなのではなく、ロリコンという存在の全般が先輩なのではと思ってしまっただけその愛は無量大であり、彼方に広がる大宇宙と先輩のロリコンさ、そのどちらが広大かと問われたら、わたしは答えることができないでしょう。

では先輩がどれほど幼女を好きか、ついでにわたしにどれくらい先輩のことが好きかを端的に表せるエピソードがあります。少し昔というか始業式の数日前のことです。

ある日、先輩はこう言いました。

「ペットボトルには二種類ある。ただのペットボトルと輝くペットボトルだ」

「輝くペットボトル？」

それは休日のことです。いつものように道行く幼女を眺めて愛するために外出した先輩を、これまたいつものようにわたしがストーカーキングしていました。三百六十度どこを見渡してもおかしいことなど一点も見当たらない、いつも通りの休日の日常です。

「なんですか、輝くペットボトルって？」

ただ先輩の外出はなぜか追跡者を振り切ろうとするかのようにあちこち場所を移動するために、同行する方としては少々疲れます。先輩が自動販売機で飲み物を買って足を休めたのを合図に、わたし達は休憩をしていました。

「そうだね。例えばこれはただのペットボトルだろう?」

わたしの疑問符に先輩は自分が飲んでいたペットボトルを軽く持ち上げました。すでに飲み終わったようで、その中身は空になっています。

「はい、まあそうですね」

「飲み物が入っていないペットボトルには、普通何の価値もない。けれど十三歳未満の女の子が飲み終わったものは輝くペットボトルとなる。僕の目には、その差の見分けがつくんだよ。十三歳以上の人間が飲んだペットボトルはただのペットボトルでしかないが、五歳以上十三歳未満の女の子が飲んだペットボトルはまばゆいばかりの光を放っているんだ」

「どうやら先輩に備わっている幼女感知機能は、人間の域を越えつつあるようです。」

さすがに啞然としていますと、先輩は飲み終わったペットボトルを自動販売機の脇においてあるゴミ箱に入れました。

「このゴミ箱にはないね。あればそれを収集して水筒代わり使うんだが……残念だ」

「では先輩。これを進呈します。輝いてますか?」

「いやいらないよ。ただのペットボトルなんて、ゴミでしかない」

わたしが自分の飲み終わったペットボトルを見せると、先輩は首を横にふりました。

なんとも素っ気ない反応です。思春期の男であるならば、女の子が口をつけたペットボトルを前にすれば「間接キス!？」と胸をどぎまぎさせるのが一般的な反応ではないのでしょうか。

わたしは「むう」と唸ります。

「先輩は五歳以上十三歳未満の女の子にしか興味がないようですが、そもそもそれは何故ですか？ 十歳を過ぎれば、わたしより発育のよい女の子はちらほらでてきます。幼いからといって純真であるというところが幻想なのを承知してないわけでもないでしょう。五歳以上十三歳未満にあつて、わたしにないものとはなんですか？」

「君が六歳でも十歳もなく、いま十六歳であることだよ。そんなことよりもついい加減、付きまとうのはやめてくれ。さすがに僕も疲れよ」

そう言つて先輩は再び歩き始めました。

先輩の言葉はとても納得のできるものではありません。そもそも理由になつていません。いつもならば先輩の言葉など無視してとことんつきまとうわたしですが、その時はその場で数秒思索しました。

「……………」

わたしの視線の先には、先輩がペットボトルを捨てたゴミ箱がありました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6010z/>

ロリコン・コンプレックス！

2011年12月23日00時48分発行